

西洋音楽史4期を学ぶ「鑑賞」の授業構想

— 中学校音楽科におけるピアノ曲を用いた教科指導を通して —

木村 綾花
教科領域コース

1. 研究の背景と目的

中学校音楽科の目標において、音楽的な見方・考え方は音楽を学ぶ上での中核をなすものとされる。音楽的な見方・考え方とは、中学校学習指導要領¹⁾によると、「音楽に対する感性を働かせ、音や音楽を、音楽を形づくっている要素とその働きの視点で捉え、自己のイメージや感情、生活や社会、伝統や文化などに関連付けること」とされている。鑑賞の授業において、音楽の特徴とその背景となる文化や歴史などとの関わりを理解させることは重要である。また、小林(2023)²⁾は、「文化的・歴史的背景の視点から複数の音楽を比較することによって、それぞれの音楽のよさをより深く味わうことができるようになる」と述べており、その重要性を示唆している。しかし、鑑賞で音楽史を題材として取り扱う検討がなされた例は少ない。また、ピアノはこれまで音取りや伴奏として用いられてきたが、鑑賞で活用することについては検討の余地がある。鑑賞活動においてオーディオ機器だけでなく実際の楽器の音色を聴くことや、複数の楽曲を、作曲された時代ごとに一連の流れで比較聴取するという機会を持つことは、生徒たちに新たな音楽の視点をもたらし、音楽の見方・考え方を深めることにつながると思われる。

本研究では、ピアノ曲を用いて西洋音楽史における4期の時代の流れを掴み、それらの比較を通じて特色の違いを捉えることのできる体系的な鑑賞教材の開発と検討を行った。主にバロック、古典、ロマン、近・現代の4つの時代の代表的な作曲家のピアノ作品を教材として扱う方法を考え、時代の変化による表現の違いや楽曲構成の特徴などを体系的に学習する方法を検討した。授業実践により、生徒が西洋音楽の時代の流れやその特色を掴むこと、音楽の諸要素を知覚し、音楽のよさや美しさを伝え合うこと、社会や文化などとも関連付けて考えていくことなどを目指す。

2. 中学校音楽科の鑑賞の現状と、音楽史を学ぶことの意義

現在の中学校音楽科における鑑賞教材として、西洋音楽の分野では、教科書に挙げられている

『「四季」から「春」/ヴィヴァルディ』、『魔王/シューベルト』、『ブルタバ/スメタナ』などを取り扱うことが多い。通常の鑑賞の授業においては、一つひとつの作品を詳しく扱い、曲を聴いて感想を記述したり意見交換を行ったりする学習活動は実施されるが、時代の流れを学ぶことや、時代の変化による作風の違いなどを比較聴取する学習は題材として扱われにくい。教科書に掲載されている複数の作品は、作曲された西洋音楽史における時代区分が様々であり、それぞれの時代背景は連続するものではなく断片的に扱われることとなる。

しかし、音楽史を学ぶことの意義として、西原(2015)³⁾は、「音楽は、人間の感性と悟性が融合された総合的な学習である。音楽を教え、音楽を知る上でとりわけ重要なのは、特に歴史や文学の

理解である。」と述べており、歴史や文化を同時に教えることで、生徒は今鑑賞している作品が、どのような状況のなかから生み出されたのかを深く理解することができるとしている。また、小林（2023）は、音楽文化に対する理解を深めるためには、その場で鳴り響く音や音楽だけではなく、文化的・歴史的背景の視点から、音楽の特徴を捉えることが有効であると述べている。さらに、音楽の比較聴取に関しても言及しており、音楽同士を比較することはそれぞれの音楽のよさをより深く味わうことにつながり、そのような学びの蓄積によって、音楽文化を概念的に理解することができるとしている。このことは、音楽文化と豊かに幅広く関わる資質・能力を育むという音楽科の目標においても重要であると考ええる。

3. 西洋音楽史 4 期を比較聴取する鑑賞教材の開発に向けた検討

【3-1】ピアノの作品を扱う理由

作品の比較聴取にあたり、ピアノ曲を扱う理由としては、①時代ごとの作風の違いが分かりやすいこと、②限られた授業時間内でも扱いやすい曲の長さであること、③音楽室に必ずあり、生徒にとっても身近で、教師が演奏することも可能であることが挙げられる。教師による実演は、CD や映像資料などの音源と比べ、視覚的な演奏効果や生の音色を身近に感じることができ、技法がもたらす音色や表現をより鮮明に感じ取ることができる。学校の授業においても、生演奏を通して生徒が目や耳からダイレクトに音楽を感じ取り、同じ空間をともにした聴衆として感想を共有し合うという活動を行うことができれば、音楽とのより豊かな関わり方を生み出すことにつながると考える。

【3-2】取り扱う作品について

バロックでは『フーガ短調/J. S. バッハ』、古典派では『ピアノソナタ ハ長調 K. 545/モーツァルト』、ロマン派では『エチュード「革命」/ショパン』、近・現代では『6つのピアノ小品 Op. 19/シェーンベルク』を扱った。これらの4曲は、教科書掲載曲〔主要教材〕として挙げられているものや、その時代における音楽的特徴がよく表れている作品を選定したものである。前述の作品の比較聴取を通して、西洋音楽史における4期の時代の流れを掴み、それぞれの音楽表現や作風などの違いを体系的に理解するとともに、時代ごとの音楽のよさや美しさを味わうことをねらいとした。

【3-3】アンケート調査

実践を行う第3学年のクラスの生徒35名に対して行ったアンケートでは、日頃から音楽聴取を行っている生徒は多いが、ポピュラー音楽をよく聴いている生徒が多く、クラシック音楽に触れるのはほとんど学校の音楽の授業のみであるという生徒が全体の9割近くいることが分かった。生徒にとって普段の生活で関わり合っている音楽と、学校の授業で関わっている音楽とは別物という認識が強いことが想定される。学校の授業では、学習指導要領にもある通り、音楽文化についての理解を深め、様々な音楽がもつ固有の価値を尊重し、その多様性を理解しながら学んでいることの意味や価値を生徒が自覚できるようにしていくことが大切であるといえる。音楽科教育では、生徒が音楽の多様性を理解し自らの音楽の嗜好性を広げ、クラシック音楽を含む多様な音楽に関心を広げていくことが大きな課題であり、音楽の授業での学びが人生や社会において生かされ、音楽文化と豊かに関わる資質・能力の育成につながるような鑑賞の授業の在り方を検討していく必要がある。

4. 実践報告

実践報告として、第3学年の1クラスにおいて行った2時間扱いの内容についてまとめる。

第1時では、バロック～近現代の4期の音楽史の流れを理解し、それぞれの音楽的特徴や音楽家、鍵盤楽器の特徴、背景などを学びながら、各時代に作られたピアノ曲を比較聴取する学習を行なった。扱う作品は、【3-2】で示したものである。各作品に対して、音楽を形づくっている要素として旋律、テクスチュア、強弱を知覚し、感じ取ったこととともに考える内容を実践した。

第1時は4期の時代の特徴とピアノ曲を順番に扱い、時代による音楽の特徴の違い、時代による音楽の特徴の違いなどを掴みながら鑑賞活動を行うことができた。ワークシートは、4つの時代を横に並べて作成した。時代の異なる作品を順番に比較聴取したことで、生徒からは他の作品との違いを意識しながら鑑賞したことによる記述も見られた。意見の共有はタブレットを用いたが、実際に生徒同士で話し合う活動は、時間の都合上行わなかった。少しでも

生徒のワークシートの記述より一部抜粋(古典派の例)

古典派 ♪ピアノソナタハ長調 K.545/モーツァルト	
旋律 テクスチュア 強弱 など	なめらかなところとスタッカートが強調されているところがある。メロディと和音の伴奏が分かれていて、掛け合いのような部分がある。強弱がはっきりしている。音はフーガト短調よりも高いけれど、強弱ではこっちの方が弱い。
感じ取ったこと	明るめの音楽。優しい感じ。聴いていて楽しくなるような曲。さわやか。音が追いかけてっしている感じ。かわいらしい。

生徒同士の交流の場を設けられるように、授業構成には今後、さらなる改善が必要である。

そして、第2時では、第1時での学びを踏まえて、提示した14曲の作品の中から気に入った曲を一曲選び、聴きどころを考え紹介し合う活動を行なった。4期の作品の学習を踏まえて自分が気に入った時代の曲をグループで紹介し合うことを通して、音楽の好みや感性の多様性を理解するとともに自身の価値観に気づき、時代ごとの音楽の特徴やよさを味わうことが出来るようにした。

曲名、作曲家、時代区分、【聴きどころポイント】(ワークシートの記述より記載)

おすすめしたい曲を一曲取り上げて、気が付いた特徴や感じ取ったことなどを紹介しよう。	
曲名：ラ・カンパネッラ	作曲家：リスト 時代区分：ロマン派
なめらかなメロディの裏で高音のリズムが刻まれていたり、速さが変わる部分が多かったりと自由な曲調になっていて、ロマン派の独創性が強調されるという特徴がよく表れていると感じた。歯切れ良いリズムで演奏されていて、疾走感がある曲だと思った。弾むようなメロディーが続いたあと、また初めの滑らかなメロディーになるところが気に入っている。	

ワークシートや授業での様子を通して、曲の特徴や感じ取ったことと、作曲された時代の特徴とを関わらせながら音楽を味わうことができている生徒も多く見られた。これらは、音楽史として歴史的背景を学び、音楽を比較聴取したことによる成果だと考えられる。鑑賞の視点が、音楽的な知覚・感受だけでなく音楽文化にまで広がり、鑑賞が深まっている様子が見て取れた。

また、生徒のふり返りでは、時代ごとに作品を比較したことによる気づきが記述されていた。「その時代に何が行われていたのか、どのような背景があるのかも知りたいと思った。」など、鑑賞の視点として時代背景に目を向けたり、「古典派の細かいリズムが好き。」など、自分なりに音楽のよさの発見し、好きな時代や作品について言及したりしていた。また、「他のピアノ曲やオーケストラを調べて聴いてみたい」などと、クラシック音楽に対する興味関心が生まれている様子もあった。「時代や楽器、作曲者など広く目を向けて楽しみたいと思った」、「これから先の音楽はどう変わっていくのか気になった」というように音楽鑑賞への視点がさらに深まっている様子もあった。

授業全体としては、同じ曲を聴いても感じ方や着目するポイントは人によって異なるため、生徒が選択した曲ごとに集まって考えを共有することで、新たな視点が生まれ、曲に対しての考えがさらに広がり、より深く音楽を味わうことにもつながると考える。また、最後のまとめとして、生徒が自ら選んで鑑賞した曲に対して、なぜその時代を選んだのか、その時代のよさは何だったのかを振り返りまとめることで、もう少し広い視野から曲を理解し考えを深めることができると考える。

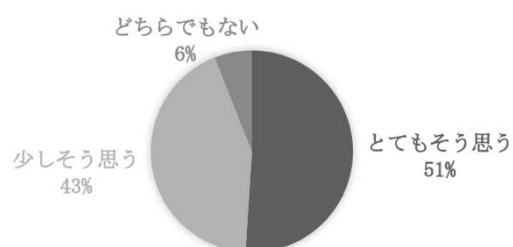
5. 実践後のアンケート結果からの考察

前にアンケートを実施したクラス 35 名において、授業後にアンケートを行った結果を以下に示す。

① 授業で音楽史について学んだことで、クラシック音楽に対しての見方・考え方に何か変化はあったか。(複数回答可)

- ・クラシック音楽に対する興味関心が広がった。… 22 票
- ・今までに音楽の授業などで聴いてきた曲に対して、新たな発見が生まれた。…16 票
- ・自分が好きだと感じる曲を見つけ、自身の音楽の感性を知ることができた。…15 票
- ・聴いたことのあるピアノ曲がいつの作品なのか分かり、面白くなった。…14 票
- ・実際に生でピアノ演奏を聴いてみたいと思った。…12 票
- ・音楽だけでなく、その背景に(文化や歴史)との関わりにも関心が生まれた。…11 票
- ・特に変化はない。…1 票

② 授業を通して、クラシック音楽やピアノ曲などをもっと聴いてみたいと感じたか。



アンケート結果から、授業を通してクラシック音楽に関する興味関心が広がり、さらにクラシック音楽やピアノ曲などを聴いてみたいと感じた生徒が多かった。

6. まとめ・今後の課題

本稿では、西洋音楽史 4 期を学ぶ「鑑賞」の授業構想について、実践報告とともにその意義を考えた。クラシック音楽は数多くの作品があるが、学校の音楽の授業で扱われるのはそのごく一部であり、選択される曲も単発的である。しかし、長い西洋音楽史の中でつくられてきた数々の作品を、つくられた時代に沿って比較聴取することで、文化的・歴史的な背景と音楽とを関わらせ、音楽的な見方・考え方を働かせた鑑賞活動を行うことができた。

なお、文化的・歴史的な背景を踏まえながら作品を扱う際には、生徒の発達段階に応じながら内容の量や質に配慮していく必要がある。作品の特徴は作曲家によっても異なり、その特徴が音楽史における時代区分によって見られるものなのか、その作曲家の作風に帰着するものなのかを見極めることは生徒にとって難しいだろう。しかし、あくまで音楽をより深く理解し味わうための手立てとして、時代に沿って文化的・歴史的な背景も学びながら音楽作品を捉え、比較聴取することは、社会や文化と音楽との関係に目を向けることにつながり、音楽文化と豊かに関わる資質・能力の育成につながる。音楽科教育の鑑賞において、楽曲の音楽的な知覚・感受だけでなく、文化的・歴史的な背景への視点を取り入れた教材研究をさらに進めていくことを、今後の課題としたい。

注

1) 中学校学習指導要領(平成 29 年告示)解説 音楽編(文部科学省), 10.

2) 小林史子. 2023 「音楽鑑賞教育に求められる文化的・歴史的な背景への視点—ヨーデルを事例とした考察—」『玉川大学芸術学部研究紀要』(2023), 54.

3) 西原稔. 2015 「学校教育における音楽科の意義と将来展望」『音楽教育学 45 巻 1 号』(2015), 71.